わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

150

春の雑感

ここ最近、失くしたものが無事戻ってくる経験を続けて味わった。

ひとつめは、携帯電話。どうやら新宿から東京駅までのタクシーの中で落としたらしいことに、帰宅してから気づく。しかし、レシートもなければどのタクシー会社かもわからない。知恵を捻り、最後に入った店に連絡し、近くを走るタクシー会社の候補を教えてもらった。いくつかのタクシー会社に電話をかけ、問い合わせてみたが手がかりなし。あきらめかけていたところに、ドライバーから電話をもらった。やはりタクシーの後部座席に置いたままだったとのこと。翌朝、再び東京駅で待ち合わせ、無事手元に戻った。そのときのドライバーの言葉にしびれた。「本当に申し訳ない。自分が（私が降りたあとに）ちゃんと確認をすべきでした」と。ドライバーが神々しく見えた瞬間だった。

二回目は、財布である。うっかり公共トイレに置きっぱなしにしたのだ。小一時間ほど経って慌ててトイレに舞い戻ったが、どこにもない。トイレの管理会社の人から、最寄りの交番に行くようアドバイスをもらい、半分だけの期待を胸に行ってみた。

あったのだ！　机の上に置かれた財布が目に入ったとたん、安堵のあまり力が抜けた。聞けば、妙齢の女性が拾ってくださったとのこと。10万円近く入っていた現金もカードもそのままだった。

このエピソードを人に話すと、多くは「やはり日本ね～」と口にする。確かに。

…と、相槌を打ちながら、ふと思い出した。私は海外でも随分たくさんの人に助けられてきた。まずは、これまた財布である。ワシントンDCを訪れたときのこと、ダレス空港からホテルまでのタクシーの中で失くしたことに、チェックインの際に気づき、真っ青になった。英語力も度胸もなかった若い頃の話である。目の前が暗くなるとはこのことだ。しかし、何とタクシーのドライバーがわざわざホテルまで届けてくれた。がっしりした強面の黒人ドライバーがホテルに現れたときは、嬉しさより驚きの気持ちでいっぱいになった。礼を言う私に、「じゃ、いつか日本に招待してよ」と笑った彼のさわやかな笑顔は、今も目に浮かぶ。

そのほか、ニューヨークではホテルのルームキーを外のドアノブに差し込んだまま一晩眠ってしまったり、シカゴの街で夜道に迷い、ストリートシンガーの黒人歌手に道案内してもらったり…。彼は、「このあたりは危ないからひとりで歩いてはだめだよ」と、身の程知らずの私を叱ってもくれた。これまで、良く無事で生きてきたことかと我が身の運の強さをしみじみ思う。同時に、怖いもの知らずであったと反省もする。

ある人は、「これまで日本には3回の国難があった。ひとつは元寇、日露戦争、そして先の太平洋戦争だ」と言った。これに対し韓国の人は「朝鮮半島は過去200回の国難がありました」と述べたという。日本が平和ぼけと揶揄される一因はここにあるのかもしれない。しかし、今や日本でも携帯や財布を落としたら二度と戻ってこないことのほうが多いのだ。

誰にでも悪と善があり、どこの国にも悪人と善人がいる。日本の人の優しさとは別の、苦難と差別を乗り越えた人々のたくましさや心根に触れるのも、時には必要なのだろうと数々の失敗を振り返りながら思う春の日々である。

イラスト・伊藤栄章